

# Tingu Atayal の主体移動構文における SVC 構成パターンと 際立ちをめぐる予備調査

## Preliminary Research on Compositional Patterns and Semantic Saliency of Serial Verb Constructions of Tingu Atayal

● 鈴木 武生  
Takeo Suzuki

### 要旨

本論では C'uli' Atayal 方言に属する Tingu Atayal の主体移動表現に関するデータをもとに、その動詞連続構文 (SVC) におけるコンポーネントの構成パターンをめぐり、文法的特徴、構成上の制約、様態／経路の際立ちについて考察する。データ量の面でもまだ予備調査段階にあるため明確な結論を出すことはできないが、何らかの規則性を持った文法特性が関与しているとみられる例が一定数見つかり、そこから西オーストロネシア諸語の類型論的特徴とのかかわりにおいて Tingu Atayal が持つ一般性と個別性をより効果的に捉えるための可能性を探る。

キーワード：主体移動、SVC、様態、経路、際立ち

### Abstract

This paper discusses the grammatical distinctiveness, compositional constraints and manner/path saliency of serial verb constructions (SVC) of Tingu Atayal, a C'uli' Atayal dialect, by analyzing the data of its self-agentive motion sentences. The reported research is still in the preliminary stage in terms of the volume of available linguistic data. Among the collected data, however, I have discovered several examples which suggest that particular grammatical features may be associated with the distinctive behavior of SVC examples. In the typological framework of western Austronesian languages, I attempt to more effectively account for the relationship between general and distinctive features of SVCs of Tingu Atayal.

**Keywords** : self-agentive motion, SVC, manner, path, saliency

## 1 はじめに

本論では西オーストロネシア言語 (WAN) の一つである C'uli' Atayal の主体移動を表現する動詞連続構文について、この構文に参加するコンポーネント動詞のクラスを検討すると同時に、可能な動詞連続パターンと、それに伴う形態統語論的・意味論的制約を検証する。

### 1.1 C'uli' Atayal について

C'uli' Atayal は台湾の Atayal 語群に属し、もう一つの Squliq Atayal とともに主要方言を構成する。本論で扱う C'uli' Atayal は台湾苗栗県泰安郷 (天狗部落、梅園部落、大安部落、延安部落、象鼻部落、士林部落等) 一帯で話される下位方言であり、以下 Tingu Atayal と表記する。

WAN には主には Atayal (VSO, VOS), Cebuano (VSO), Malay (SVO), Saisiyat (VS, SVO), Tagalog (VSO), Tsou (VOS) などがあり、いずれも形態論が発達しているほか、焦点構造という特徴をほぼ共有する。

Atayal 族は Taiyal、Tayan、Atayan と呼ばれ中国語では「泰雅族 (Tàiyǎzú)」と表記される。人口は89,741名で、台湾北部から中部の山岳地帯に居住する。

C'uli' Atayal の語順は VSO または VOS で、Agent Focus, Patient Focus, Recipient Focus, Locative Focus の焦点構造を持ち、格には主格、属格、場所格、具格、共格、中性格<sup>2</sup>がある。

下記に例文を挙げる。

- (1) a. Vanazi =su' inu' viiru' hasa?  
buy.past you where book that  
あなたはその本をどこで買ったか？
- b. Ini kava kamayal kaa'i' atayal kanayril =mu.  
Neg can speak language Atayal woman my  
私の妻はタイヤル語が話せない

## 1.2 Atayal の主体移動表現と類型

Atayal の主体移動表現はまず Talmy (2000) の衛星枠付け言語対動詞枠付け言語という類型論から大きく発展した。この類型的特点は(2)に示すように、経路概念がイベントの動詞と付随要素(衛星)のどちらに現れるかによって区分するものである。

- (2) a. The bottle floated out of the cave.
- 
- b. La botella salió de la cueva flotando.
- c. Kia utux yuyut mingkahon saku takayu (ru) niyan malngya saku siya.  
有る<sup>1</sup> 瓶 出る Loc 穴 (Conj) Dxs 泳ぐ Loc 水<sup>3</sup>

(2a)の英語では経路が衛星 *out of (the cave)* で表現される。こうした言語を衛星枠付け言語と呼ぶのに対し、(2b)のスペイン語では経路が移動概念とともに動詞 *salió* で表現されており、このタイプを動詞枠付け言語と呼ぶ。前者を簡略化し S 言語 (satellite-framing の略)、後者を V 言語 (verb-framing language の略) と呼ぶ。(2c)は Tingu Atayal のデータで、専用の経路表現はないが、動詞 *mingkahon* が内在的に移動義を持ち、場所格 *saku* + 名詞 (*takamu*) が結びつくことで経路が語用論的に解釈されることから V 言語として分類される。

この Talmy 式類型論をもとに Slobin (1997, 2000, 2004, 2006) は各言語の移動表現を構成する主動詞が様態と経路のどちらが高い際立ちを持つかという類型論的基準を提案した。一般的に S 言語では様態が高い際立ちを持つのに対して、V 言語では経路が高い際立ちを持つとされる。

1 2018年1月 Wikipedia 調べ。

2 Tingu C'uli' の文法の詳細についてはまだ完全に調査されていない。

3 グロスの略語は下記の通り：AF = agent focus, Asp = aspect, Com = comitative, Conj = conjunction, Dxs = deixis, Gen = genitive, Lin = linker, Loc = locative, Neg = negative, Nom = nominative, Part = particle, Pat = patient, PF = patient focus, Ptl = particle, Rf = referential, Top = topic

Atayal の際立ちについては現在 Squliq Atayal を中心に広く研究されており、特に Huang & Tanangkingsing (2005) (以降 H&T 2005) が Squliq を含む WAN の際立ちについて、Frog Story (1969) に基づくインフォマントのナラティブ分析、および主体移動表現内のコンポーネントの出現分布を調査することにより、Squliq が典型的な V 言語であり、高い経路の際立ちを持つことを主張している。

H&T (2005) の調査では、動詞が単独で現れる場合と動詞連続構文 (SVC) で現れる場合があり、主体移動イベントには M=P の動詞クラスがよく出現することが指摘されている。このタイプは本来は *run* のように様態動詞 (M(anner)) を表すが、潜在的に移動義を持っているため Ground と共起することにより経路動詞 (P(ath)) として解釈が語用論的に生まれるという。筆者が行った Tingu Atayal の調査 (鈴木 2019) では、こうした M=P の動詞クラスが純粋な経路動詞クラスよりも大きく、さらに SVC で表現されることも多いことを報告した。

(3) は姿勢表現と様態動詞が連続した Tingu Atayal の例である。ここでは様態義のみを持つ表現 *kintali* が主述語として機能しているとすると、様態動詞 *hamakay* が M=P クラスとして移動義を提供しているので、V1+V2 相当の構文つまり SVC とみなすことが可能となり、この SVC は高い様態の際立ちを持つと判断できる。

(3) 姿勢表現 (?様態動詞) + 様態動詞 + Ground

|         |                        |         |      |       |
|---------|------------------------|---------|------|-------|
| Wayan   | kintali                | hamakay | paa' | Yapu. |
| Asp/Dxs | ?AF-on-hands-and-knees | AF-walk | room | Yapu  |

Yapu は四つん這いになって部屋に入って行った。

そのため様態・経路の際立ちをより厳密に捉えるには SVC を構成する動詞クラスと形態統語的特徴をより詳しく検証する必要がある。

## 2 SVC の構成パターンと制約

Aikhenvald (2006) によれば、SVC は単一の述語として単文を構成し、コンポーネントが統語的に依存した標識を取らず、TAM (Tense/Aspect/Mood) と極性を共有し、下位事象の時間的類象性を持ち、事象の全体として単一事象を表現し、状態ではなくイベントまたはプロセスを記述すると述べている。Yeh and Huang (2009) (以降 Y&H 2009) は台湾諸語のデータの観察に基づき、2 動詞型 SVC における動詞連続について、(4) の構成パターンを挙げている。

(4) 2 動詞型 SVC の動詞連続構成パターン

1. Emotion/State of mind + Action/Motion
2. Manner + Action/Motion
3. Modal + Action/Motion
4. Motion + Action/Motion

いずれの構成パターンでも活動/移動動詞が V2 に来る。(4-1) の Emotion/State of mind では *mqas* “be happy”/ *ngungu* “be scared”/ *qihul* “relectant” (Squliq) や、(4-2) の Manner では *lua* “easily” (Tsou)、(4-3) の Modal では *wa-wa’iSan* “good at/able” (Saisiyat) などが V1 に出現することが確認されているが、すべての modal verb および emotion/state of mind verb が参加できるわけ

ではなく、また言語による違いも大きい。また Y&H (2009) の分類では “want to/try to” のような補文構造を持つものは除外されている。また完了を示す *wal* (Squiliq) のような純粋なアスペクト標識も除外されている。

このほか Huang(1995)は Mayrinax Atayal (汶水方言) において AV-only 制約があることを報告している。

これは SVC において V1が AV (agent voice) であろうと Non-AV であろうと、V2は AV でなければならないというものである。

- (5) a. yakaat m-a'usa' i' k <um>alup i' cacan i' yumin.  
 Neg AF-go Lin hunt AF- hunt Part tomorrow Nom Yumin  
 Yumin は明日狩りに行かない。 (Huang 1995 : 196, (9a))
- b. ptiqaru-φ i' m-anig ku' mami'  
 finish -PF Lin AF-eat Nom.Rf cooked rice  
 ご飯を食べ終わる！ (Huang 1995 : 195, (8a))

(5a, b)はボードにした V2が、V1の焦点と無関係に AF になっている。このほか、この制約は Paiwan や Kavalan などにも見られるという報告がなされている。

### 3 Tingu C'uli'のデータと考察

#### 3.1 Manner+Action/Motion

(4)では一貫して Action/Motion が V2に挙げられている。本論では移動動詞を扱っているので、Tingu C'uli'で V2で行為義と移動義を持つものは、*mazinah* “run”や *paraka* “fly”のように、いずれも M=P クラスとして分類されるため、V2の Action/Motion の動詞は Manner/Path の動詞と読み替えて差し支えない。これまでの調査に関する限り Tingu C'uli'ではこの M=P クラスの動詞が純粋な経路動詞よりも多く存在している (鈴木 2019)。

(6)に挙げる例では、Manner/Path+Manner/Path が連続し、主動詞 V1が様態を明示し、V2 および Ground の組み合わせによって経路移動解釈が語用論的に含意される。

- (6) Manner/Path+Manner/Path  
 Wayan mataveyraw mayup ravan ku mari.  
 Asp/Dxs<sup>4</sup> AF-roll AF-fall box Nom ball  
 ボールが転がって箱に落ち (て入っ) た。

*mayup* は典型的な M=P 動詞で様態 (落ちる) と移動 (入る) の意味がともに語彙化されている。ここでは V2が経路移動義を担い、様態義は V1の *mataveyraw* が担っている。

V1位置には(6)と同様に Manner/Path が置かれるが、V2には直示移動動詞が置かれるパターンも存在する。次の例を見られたい。

4 *wayan* の文法的地位については後述。

- (7) Manner/Path+Deictic Motion  
 Mazinah =nya kaliyah musa' gakko.  
 AF-run he everyday AF-go school  
 彼は毎日走って学校に行く。

さらに次の(8)では V1 に通常の他動詞が出現し、移動の付随行為が様態として表現されている。

- (8) Action+Deictic Motion  
 Heya ga mutu' matayux viiru' musa' gakko.  
 he Top always AF-read book AF-go school  
 彼はいつも本を読みながら学校に行く。

少数ではあるが、Tingu Atayal でも副詞が動詞として V1 に現れる例が存在する。ただしすべての副詞が様態動詞として V1 になる文法的資格を持つわけではない。例文(9)は接続詞 *ru* が二文を連結している。第1文中の副詞 *ya'nga* (速く)は拘束形主格代名詞=*nya* を伴うため V1 としてみなせる。また2文中の副詞 *tahoway* (ゆっくり)には代名詞の修飾がないが、ここでは *ya'nga* がすでに主格表示しているため不要なのかもしれない。

- (9) Adverbial+Deictic Motion  
 Utux pu'ok **ya'nga** =nya minkahon takayu na kahoni ru  
 one owl quickly it AF-come hole Gen tree Conj  
 wayan **tahoway** AF-paraka i ragiyah.  
 Asp/Dxs ?AF-slowly fly Loc mountain  
 一匹のフクロウが急に木の穴から飛び出し、山に飛んで行った。

実際、副詞 *tahoway* が動詞として機能する例も報告されている。

- (10) **Tahoway** =ta mirai toraku.  
 AF-slowly we drive トラック  
 我々はトラックをゆっくり運転する。

副詞以外にも、一部の形容詞 *lawkah* (強い・速い)も様態動詞として V1 に参加する。

- (11) Adjective+Manner/Motion  
**Lawkah** =su' mazinah.  
 AF-fast you AF-run  
 あなたは走るのが速い。

(11) では *lawkah* に2人称拘束形主格代名詞が付随し V1 として機能しているものと考えられる。これら副詞や形容詞は様態義を説明しているので Y&H(2009)の分類に従えば(4-2)の Manner

+Action/Motion というカテゴリーに分類されるだろう。しかしこれまで取得したデータを見る限りすべての副詞や形容詞が様態解釈を獲得して V1 に参加するわけではなさそうである。

現在確認中ではあるが、姿勢表現が様態表現として V1 に参加できると考えられる例が存在する。(3) の例を再掲する。

V1 位置に姿勢動詞が現れることで V2 の移動に伴う付随様態を表現する場合もある。

(12) Posture+Manner/Path

Wayan kintali hamakay paa' Yapu.  
Asp/Dxs ?AF-on-hands-and-knees AF-walk room Yapu  
Yapu は四つん這いになって部屋に入って行った。

姿勢表現 *kintali* が行為動詞なのか状態動詞なのか、また副詞なのか形容詞のかなど、不明な点がまだ残っており今後の課題となっている。

### 3.2 Deictic Motion+Manner/Motion

直示移動動詞 (*m*)*inkahon* および *musa'* は通常 V2 位置に現れることが多いが、V1 位置に出現することもある。

(13) Deictic Motion+Manner/Motion

**Inkahon** kong mazinah (sahoy na) sali.  
AF-come I AF-run (inside Gen) house  
私は走って部屋の家(の中)から出てくる。

直示移動動詞 *inkahon* は通常「～から戻って来る」を意味するので、上記例文では話者視点は家の外に置かれていることが分かる。しかし(14)を見てみよう。

(14) Minkahon kong tanux muwah (kong) sali', musa' (kong) paa'.  
AF-come I outside AF-come (I) house, AF-go (I) room  
私は外から家(の中)に(戻って)来て(私は)家に入り、(私は)部屋に入る。

この文に「来る」を意味する直示移動動詞が二つ存在しているのはなぜだろうか？一つの解釈は (*m*)*inkahon* の意味が希薄化し *from* のように起点移動義のみを表す一方、到達点も含めた本動詞「来る」の意味は *muwah* が担っているという見方である。もう一つの見方として、「～から戻って来る ((*m*)*inkahon*)」+「～に来る (*muwah*)」と、「～に行く (*musa'*)」の連続がアスペクト境界を超すため、それぞれ別イベントとして表現されるということが考えられる(その場合は接続詞が省略されていることになる)。ただ実際このパターンは、(*m*)*inkahon*+*muwah*/*mazinah* のような構成で、二つの動詞間に介在要素なしに出てくる例がインフォマントのデータによく見られる。こうした隣接性はこの構造が単一事象を表す SVC である可能性を支持している。

### 3.3 時間的類像性の問題

目的を伴う移動を表現する場合、Tingu Atayal では Deictic Motion+Action (Purpose) という構成パターンがとられる。

- (15) a. Musa' kong Vali' makatayux rawin =mu.  
AF-go I Miaoli AF-see friend Gen.my  
私は苗栗に行って私の友人に会う。
- b. Nanu yuwaw =su' musa' Vali' ?  
what thing Nom.you AF-go Miaoli  
あなたは何をしに苗栗に行くのか？

(15a)ではV1(移動)とV2(目的行為)において時間的類像性制約が保たれている。しかし疑問文(15b)はこの制約に違反しているように見える。これはV2が倒置されたものと考えべきか、またこれは本来目的を焦点化する形式として、「V1(目的行為)+V2(移動)」で構成される独自構文と考えるべきなのかについては今後検討の必要がある。もし(15b)が独自構文とするならば、(15a)に対応する疑問形式、例えば *Musa'=su' Vali' nanu yuwaw=su'?* (移動V1+活動V2)のようなパターンが存在することが考えられるが、この疑問文が文法的かどうかは未確認である。

### 3.4 wayan/niyan が持つ直示的視点

*wayan* は直示移動動詞「行く」の意味と完了アスペクト標識としての二つの機能を持つ。(15)の例は純粋にアスペクト標識として機能している例である。

- (16) Wayan kuzing magal su' ngaloh.  
Asp I AF-take Pat bear  
私は熊を獲った。

しかし(17)のように直示移動動詞((*m*)*inkahon*)が様態/経路移動動詞(M=P)のV2を伴ってV1に出現するパターンが存在することを考えると、V1位置に直示移動動詞 *wayan* (*wayan* は本動詞として用いられる時は過去時制解釈となる)が出現し、V2で様態移動を表現する形式があっても不思議ではない。次の例を見てみよう。

- (17) a. Wayan mazinah Yapu.  
Asp/Dxs AF-run Yapu  
Yapu は走って行った。
- b. Niyan mazinah Yapu.  
Dxs AF-run Yapu  
Yapu は走って来た。

*wayan* は完了の助動詞として機能すると同時に、「移動とともに話者の視界から遠のく/消失する」という発話者の直示的視点も含意する。その証拠として(17a)の主語には「私」を使うことができない。「消失した私」が「今ここにいる」ことになり矛盾が生じるためである。この *wayan*

の消失義は(17b)の *niyan* と文法的に対をなす。*nyan* は「移動によって話者の視点位置に出現する」という意味を持つ。こうした「直示移動を示す *wayna/niyan* + 移動動詞」の構成パターンを SVC のカテゴリーに含めるべきかどうかを判断するにはさらなる調査が必要である。

### 3.5 その他の分布と制約に関する問題

これまで筆者入手したデータまた本論に記載したデータを見る限り AV-only 制約はおおむね守られているようである。この理由については、SVC の V1 に参加可能なさまざまな動詞を調べる必要がある。これは今後の課題である。

Mood に関連した動詞が V1 に出現するパターンはあまり多くないようである。ただし、(17) の例では、*wayan* がアスペクト機能を持つことから TAM と関連した現象と見ることができる。その場合 *wayan* が Mood としての V1 として機能する例として検討する価値はあろう。

Psychological/State of mind の V1 は、これまで筆者が作成・確認した資料にはほとんど見つかっていないが *ma'ilam* (なまける) という動詞または形容詞を使った例が 1 例のみ見つかっている。

- (18)    *ma'ilan*    *musa' miiru'*<sup>5</sup>  
         *lazy*        *go*    *study* (in school)  
         学校に行って勉強するのをなまける。

この例文では *musa'* と *ma'ilan* がどのような構造関係を持つかはまだ不明だが、V2 が V1 の補文であるとするとき SVC として判定する上でさらなる議論が必要になるかもしれない。

## 4 まとめ

これまでのデータと考察から Y&H(2009) の分類((19) に再掲) のうち、(19-1) と (19-4) が Tingu Atayal の SVC における典型パターンであることが確認できた。

- (19)    2 動詞型 SVC の動詞連続構成パターン
1. Emotion/State of mind + Action/Motion
  2. Manner + Action/Motion
  3. Modal + Action/Motion
  4. Motion + Action/Motion

しかしながら、このほかにも上で見たように(19-1)や(19-3)に分類できる可能性を示唆する例もいくつか見つかっている。Tingu Atayal には M=P クラス動詞が多く、こうした動詞が単独で出現する場合、様態と経路のどちらがより高い際立ちを持つかを判断するのは非常に難しい。しかし SVC という構文レベルで際立ちの特徴を検討するならば、(19) の各パターンごとに、様態の際立ちが高いパターンと経路の際立ちが高いパターンの双方が併存している可能性があり、またその分布特性について SVC 共通の制約をよりの確に捉えることができる可能性がある。そのため今後は範囲と深度をさらに深めた調査を実施することが課題となる。

5 この例では *miiru'* は「学校で勉強をする」という解釈になる。



## 参考文献

- Aikhenvald, Y. Alexandra. 2006. Serial verb constructions in typological perspective. Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.) *Serial Verb Constructions: A Cross-linguistic Typology*. 1–68. Oxford University Press.
- Huang, Lillian M. 1995. *A Study of Mayrinax Syntax*. The Crane Publishing Company.
- Huang, Shuanfan, and Michael Tanangkingsing, 2005. Reference to motion events in six western Austronesian languages: Toward a semantic typology. *Oceanic Linguistics* 44(2), 307–340.
- Mayer, Mercer. 1969. *Frog, Where Are You?* Dial Press.
- Rau, Der-Hwa Victoria. 1992. *A Grammar of Atayal*. Doctoral dissertation. Cornell University.
- Slobin, Dan I. 1997. Mind, code, and text. J. Bybee, J. Haiman, and S. A. Thompson (eds.) *Essays on Language Function and Language Type: Dedicated to T. Givón*. 437–467. John Benjamins.
- Slobin, Dan I. 2000. Verbalized events: A dynamic approach to linguistic relativity and determinism. Susanne Niemeier and René Dirven (eds.) *Evidence for Linguistic Relativity*. 107–138. John Benjamins.
- Slobin, Dan I. 2004. The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. Sven Strömquist and Ludo Verhoeven (eds.) *Relating Events in Narrative: Typological and Contextual Perspectives*. 219–257. Lawrence Erlbaum Associates.
- Slobin, Dan I. 2006. What makes manner of motion salient? Explorations in linguistic typology, discourse, and cognition. M. Hickmann and S. Robert (eds.) *Space in Languages: Linguistic Systems and Cognitive Categories*. 59–81. John Benjamins.
- 鈴木武生. 2020. 主体移動表現における様態／経路の際立ちをめぐるパラドックス—Culi'アタヤル語のデータから—. *KLS Selected Papers 2: Selected Papers from the 44th Meeting of The Kansai Linguistic Society*. (掲載予定)
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. The MIT Press.
- Yeh, Maya, Yuting, and Shuanfan Huang. 2009. A Study of Triple Verb Serialization in Four Formosan Languages. *Oceanic Linguistics* 48 (1).